

日本とオーストラリアにおける シギ・チドリ類の保護について

ジェレミー・トンプソン

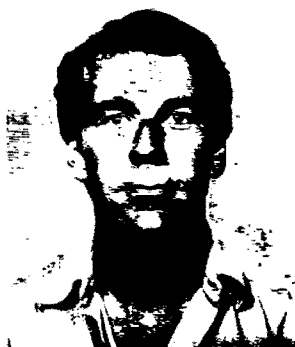
オーストラリアと日本におけるシギ・チドリ類の調査と保護にとって重要と思われる点について述べたいと思います。私の意見が、各地でシギ・チドリ類の生活を守るために研究や保護活動をしている方々の励みになれば幸いです。

効果的な保護対策がとられるためには、調査は欠かせないものであると私は信じています。データの蓄積があれば、保護問題は社会的な問題になります。このような問題では、一般的な関心が高まるのが重要なのです。

東アジアのシギ・チドリ類の渡りのコースは南極圏とアフリカ、新熱帯区のコースに比べてほとんどわかっていません。オーストラリアでも日本でも標識されたシギ・チドリ類の再捕獲のデータは沢山ありますが、残念ながら私達はまだ東アジアのシギ・チドリ類がどのように渡りを行っているのかよく判っていません。かれらは、一気に6000キロも7000キロも渡ってしまうのでしょうか。あるいは、途中グアムやフィリピンやバブア・ニューギニアの島で休むのでしょうか。おそらく、シギ・チドリ類はいろいろなストラテジー（戦略）を使っているのだと思います。けれども、なにがそれぞれの鳥達のストラテジーを決定しているのでしょうか。また、このストラテジーの選択は究極適応度 (ultimate fitness) や生存にどのくらいかわっているのでしょうか。私達は、シギ・チドリ類が春と秋の渡りで通過する他のコースについてももっと知る必要があります。春と秋は同じコースなのでしょう、それとも別々なのでしょう。このような渡りのエネルギー収支に関する疑問や生理学的疑問、採食行動に関する疑問はヨーロッパやアメリカにおけるいくつかの研究の刺激になり、保護管理や教育にとってたいへん貴重な情報を提供しました。

上に示したような研究目的の多くは、日本やオーストラリアでもアマチュアグループのボランティアの助けを得ることができます。前に日本野鳥の会によって一度行われた定期的なシギ・チドリ類のカウントは、体制を建て直して是非とももう一度続けるべきです。オーストラリアやヨーロッパの例から、こうした観察活動は長く続けられ、データが蓄積されるほど長期的な傾向がはっきりし、威力を発揮することが知られています。それから、レッグフラッキングのようにカラーマーキングの方法を標準化することや、各地で着けられた全ての標識の記録を一箇所（例えば山階鳥類研究所）に集めて管理することも必要です。

標識が見やすく、一生を追跡することが可能な種を対象に、特別の標識プロジェクトを進めるべきでしょう。たとえば、北アメリカと南アメリカの間を往復するミユビシギの標識研究では、寿命と渡りのコースについて沢山のデータを集めることに成功しています。しかし、このような仕事で最大の成果を収めるためには、関係各国の注意深い国際協力が大切です。また、衛星を用いてダイシャクシギのような大きな種を追跡調査する方法もあります。ダイシャクシ



巻頭言

ギは日本ではあまり多くはありませんが、他の国では地域的に多いところがあります。繁殖地の外では脅威にさらされているダイシャクシギの渡りの謎を解く手助けをすることによって、日本は有意義な国際貢献ができるのではないのでしょうか。

シギ・チドリ類の調査は日本全国で必要ですが、とくに有明湾のシギ・チドリ類については私達の知識に大きな穴があいています。有明湾は日本中のどこよりも沢山のシギ・チドリ類がいるのには驚きです。有明湾のような場所での定期的なカウントを行うことや、観察した色足環を報告することで、皆さんがシギ・チドリ類の保護にとって重要な役割を果たせるのだということをもう一度強調しておきたいと思います。日本と他国の間の生物同士のつながりを図表的に表すのはこの種のデータであり、それだからこそ一般の人達を啓蒙するのに役立つのです。

日本はラムサール条約を批准し、シギ・チドリ類の生息地を保護するためにいくつかの国々との双務的な条約に調印しています。しかし、日本はラムサール条約に一つの干潟も登録していません。来年釧路で開かれる湿地を保全するためのラムサール条約締約国会議はこの点を修正するには理想的ではないのでしょうか。

他の国の保護努力を知ることが干潟の保護に繋がるかも知れません。開拓当初からオーストラリアの人口密度は低く、それが自然を身近に感じて生活することとなり、生活に根ざした自然保護の意識を育てました。この感覚は近年ますます強く、環境問題は、安全保障、経済について第3の政治課題であり、選挙結果に大きな影響を及ぼします。たとえば、私は日本へ留学する前、シギ・チドリ類にとって重要な約20haのマングローブと環礁帯の開発の是非をめぐる、建設会社と地方自治体の論争に関係しました。開発側の申し出に対し、役所は計画の中止を訴えるための裁判をおこし、私は学識者として法廷に立ちました。役所は環境保護の立場からこの訴訟に50万オーストラリアドル以上もの費用を使ったのです。この一件では、自然地域であり、破壊されたら永遠に戻らない公共の財産である点で、役所は支持されました。シギ・チドリ類が増えたことや鳥を観る人が増えたこと、野外のレジャーがブームであることなどを考えると、日本でも環境への関心は高まっていると思います。

シギ・チドリ類の保護には、環境問題への人々の認識と考え方が変化することと、各国が等しく保護努力をして国際間のトラストを作ることが大事だと思います。一番大切なのは、シギやチドリの魅力をみんなに伝えることです。それが鳥学会の重要な役割ではないのでしょうか。

(訳：大堀 聡)

- ◆編集部注：トンプソン博士はオーストラリア・クイーンズランド大学の橋川次郎教授の研究室でシギ・チドリ類の渡りの研究で博士号を取られ、昨年から自然環境研究センター（旧称：野生生物研究センター）に留学しておられましたが、この10月に帰国されました。

関連学術集会 (1992)

- ◆11月15日 千葉県立中央博物館自然誌シンポ (千葉県立中央博：本号)
- ◆11月22～23日 日本鳥学会大会 (大阪市大教養部：no. 43、44、本号)
- ◆12月1～3日 第11回日本動物行動学会大会 (つくば：本号)
- ◆12月9～10日 第15回極域生物シンポジウム (国立極地研究所：no. 44)

(1993)

- ◆1月11～15日 第1回国際モズ類シンポジウム (フロリダ：本号)
- ◆4月1～4日 第40回日本生態学会大会 (島根大：本号)
- ◆9月1～9日 第23回国際行動学会議 (Torremolinos：スペイン)

関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい (2ヵ月前まで)。

飛び立つ

植田 睦之

この4月より運よく、日本野鳥の会研究センターの研究員となりました。大学出たての弱冠22才ですから、まちがいなく日本で一番若いプロの研究者でしょう。どこから見てもまだ学生です。こんな私ですから、やはりまわりの人たちも、私の就職がピンとこないようです。この原稿も「植田君のことすっかり忘れてたけど、就職したんだよね。書いてよ！」ということで依頼されました！

さて、私の所属する研究センターは、設立4年半ほどのまだ新しい機関です。勲日本野鳥の会の研究機関として、鳥類を保護するための科学的な資料を集めるのが役割です。現在は人工衛星を使用したツルの渡り調査、鳥と環境のかかわりを調べる調査、希少鳥類の調査などを行っています。1部屋しかない狭い研究室ですが、将来拡大されることをみこして、環境解析研究室、生態・行動研究室、資料室の3部門に分けられています。私は生態・行動研究室に属しています。研究スタッフは合わせて全部で6人、事務関係2人。人数は多くありませんが、何が専門だかわからないほど多方面で活躍している所長の樋口広芳氏をはじめ、生態、行動、ランドサット（人工衛星）を用いた環境解析、生理学などいろいろな研究をしている人がいます。また、卒論や修論で鳥の研究をしようとしている学生さんも大勢集まってきていて、活気のある楽しいところです。これらのみんなが刺激を受け合って良い研究ができるようにと、毎月2回の割合でセミナーを開いています。鳥にはこだわらず、いろいろな人に話をしてもらったり、自分た

ちの研究計画を練ったりしています。特に若い人は大歓迎です。ぜひ参加してください。

私自身は、研究センターでのプロジェクト研究以外に、学生時代からのツミの研究も続けています。やはり学生時代と比べて、かなり時間が制限されますが、家からわずか10～30分で行けるというフィールドの特権をいかし、効率よくデータをとるように心がけています。何しろフィールドがよく、ツミも人をおそれず、追跡調査も可能ですから、今までの猛禽類の研究では不可能だったこともいろいろできそうです。また、ツミには、住宅地の緑地で繁殖するようになったり、オナガが周囲で繁殖したりと、おもしろい研究テーマもありますし、こしばらくは、ツミの研究を継続して進めていこうと思っています。けれど、自分の研究は、研究の方向性などにこだわらず、興味を持ったことにはなんでも手を出してみる“節操のない”タイプですから、ツミにこだわらず、興味を持ったことには片端から、どんどんアグレッシブに手を出していきたいと思っています。いろいろ手を出しすぎて、すべて中途半端にならないようにだけは気をつけて……。

私は、大学出たてで、大学でも研究室で鳥の研究をすることはできませんでした。したがって、身分はプロの研究者でも、それこそまだ孵化していない研究者の卵です。孵化する（良い論文を書く）までも大変ですし、巣立つ（一流の研究者になる）まではさらに大変です。前途多難ですが、皆が認める楽天的な性格、何でもとりあえずやってみる行動力など、自分の長所をふるに使うって、気楽に頑張っていきたいと思っています。

生態学研究センター研究会報告

9月22～23日に京大会館で開かれた『動物による種子散布』のシンポジウムには世話人の予想を上回る50人以上の参加があり、特に若い世代が目だった。1日目は多肉果の問題で、岡本素治・湯本貴和、下田勝久、小南陽亮、伊東啓太郎、福井晶子、岡内由香の各氏、2日目の午前はカケス・げっ歯類による食べ残し散布のテーマで斎藤新一郎、中村浩志両氏の講演が行われた。また午後的一般講演では松岡茂、正木隆、真鍋徹、北元敏夫ほか、広木詔三の5人的一般講演が行われ、シンポは盛会のうちに幕を閉じた。（世話人：上田恵介・野間直彦）

「カラスのシンポジウム」報告

杉 森 文 夫

先に掲載いただいた鳥害研究会のシンポジウムは、遠方からの出席者も多く、43名の方々が参加された。当日（8月30日）は、中村和雄さんの司会で進められ、シンポジウムのテーマ4演題と総合討論などが、10時30分から16時まで行われた。なお、当日の講演要旨は、鳥害研究会ニュースのNo.9に掲載されているので参照されたい。

最初に、黒田長久さんによる「カラス研究の現状と課題」の講演が行われた。カラス研究の課題、特に分類と種類を中心に、生態、人間との関係、個体群の実態、管理などについて報告された。

福田道雄さんの「都市緑地に住むハシブトガラスの繁殖生態」は、東京に残された都市緑地（上野公園）という環境下で営まれている繁殖生態の報告で、従来報告されていた都内での生活とは異なる行動も発表された。

午後は、玉田克巳・藤巻裕蔵さんらの「帯広市とその周辺におけるハシボソガラスとハシブトガラスの繁殖生態」から始まった。北海道の帯広市と芽室町で繁殖しているハシブトガラスとハシボソガラスの繁殖経過と同池田町で有害鳥獣駆除されたカラス類の生殖器を調べ、2種類のカラスの繁殖生態を比較発表された。生殖器の形態調査と合わせての2種の繁殖生態は、種間の差異の話題を提供し、福田さんのハシブトガラスとの対比でも、参加者の関心を呼んだ。

北島信秋さんの「我孫子市高野山のカラス罫」の報告は、長野県や三重県の過去の調査結果と比較検討した。

また、総合討論の後で、情報交換「ネットワーク」として中村文夫さんの「罫への集合羽数に基づく東京都内のカラスの生息数の推定」の報告があり、現在の都内のカラスの生息数の推定をした。なお、佐藤文男さんの講演は取り消しとなった。

総合討論などで話題になった点を以下に紹

介する。

ハシブトガラスとハシボソガラスの分布から判断すると、日本はハシブトガラスの北限、ハシボソガラスの南限という地理的な位置にあり、カラス研究の上で日本の研究者が果たす役割が大きいとの意見が出た。北海道と東京のハシブトガラスの繁殖生態の差異の要因については、様々な意見が交わされた。また、北海道の2種類のカラスの繁殖生態の差異一営巣環境、個体数密度、繁殖開始時期などについても議論が出た。カラスの個体数と残飯などの餌との関係やカラス防除方法とその捕獲個体の有効利用の点も話題になった。罫調査では、罫内でのカラスの実質利用面積と個体数、罫内の2種のカラスの利用状況などを検討すべきであるとの指摘も出た。

今後のカラス研究に当たっては、カラス研究のネットワーク作りの必要性が指摘された。また、地方の研究者への情報提供として、カラス調査の際に何が重要なデータなのかを知らせることが必要であるなどの提案もあった。

なお、鳥害研究会への問い合わせは、農業研究センター鳥害研究室内をお願いします。

住所 〒305 つくば市観音台3-1-1
電話 0298-38-8825または8925

最後になりましたが、講演を引き受けていただいた演者の方々と、当日会場の提供をいただきました千葉県手賀沼親水広場に対して、厚くお礼申し上げます。

【訂正】

『鳥学ニュース』No44に下記の印刷ミスがありました。お手持ちのニュースをご訂正下さい。

1ページ14行目：

「何にもなし」→「何でもあり」

1ページ15行目：

「何でもあし」→「何にもなし」

第4回国際行動生態学会に参加して

藤岡 正博

地球の反対側は近すぎた……。第4回国際行動生態学会は、ニューヨークの南西約100kmのプリンストン大学で8月17日から22日に開かれた。ニューヨークまでは直行便で約12時間あまりと早くて便利。が、飛行時間が時差とほぼ同じなので半日にして昼と夜が完全に逆転し、最後まで時差ボケに悩まされる羽目になった。

しかし学会は充実していた。7時過ぎの朝食時からポスターを前にした議論が始まり、夕方5時半まで4会場で口頭発表、さらに夜8時まではディナー兼ポスターという過密スケジュールが連日続けられた。元気な人はさらに深夜のキャシュバブで活躍した。

約200の口頭発表と400のポスター発表のうち口頭発表について分析してみた(ポスターまで手が回らなかった)。まず研究対象では鳥がもっとも多く、41%を占める。昆虫と哺乳類がそれぞれ約16%、魚が10%なので、鳥学の役割がいかに大きいかが想像できる。鳥の中では鳥全般を扱ったものが10%、非スズメ目が28%、スズメ目が62%と、かなりスズメ目に片寄っている。

発表者を国別に見ると、この分野が北米とイギリス、北欧で盛んなことがわかる。多い順にアメリカ38%、イギリス22%、カナダ9%、フィンランド・スウェーデン・ドイツがそれぞれ5%に対し、アジア・中南米からはゼロ、アフリカからは1%である。なお、日本からはポスター4本のみ。この地域間の違いは経済力だけでなく基礎科学に対する国や国民の姿勢の違いによるのだろうか？

セッションは鳥の発表(カッコ内に本数)の多い順に、親による子の世話(18)、交尾相手の選択(14)、生活史(7)、採食行動(7)、コミュニケーション(6)、分散(5)などに分けられた。このように比較的せまい分野なので議論が非常に活発であった。反面、国際語としての英語に対する配慮が乏しかったのが残念だった。

私は「集団生活するオナガにおける順位と危険によるアラームコールの違い」についてポスター発表した(吉田・長野と共同)。カラス科の鳥を研究している人などがポスターを見に来てくれ、いろいろ示唆や情報もらった。ただ、現時点では行動生態学の主題にあまり触れていないことは否めず、かつては研究内容にたまたま話題性があった私は少しさみしい思いをしたのも確かである。

鳥ではDNAフィンガープリンティングを用いた研究の成果が多数発表されたが、数年前のようにこの手法そのものが表題に書かれることはほとんどなくなった。

この手法を使ってまったく新しい婚姻システムを明らかにしたのは、オーストラリアのMulder, R. A. とMagrath, M. であった。ルリオーストラリアムシクイは一夫一妻のつがいと何羽かの独身雄からなる小群で協同繁殖することが知られていた。ところが、この鳥では性的二型が極端で、雄は派手な青、雌は地味な灰色である。これは交尾が一夫一妻ではないことを示唆している。DNAフィンガープリントが明らかにしたことは、なんとわざわざ争っている周りの群れの雄が頻繁に子を残しているということであった。雄は繁殖期のはるか前から周りの群れに侵入しては雌にディスプレイし、雌はこの時に羽色を手がかりに雄を評価し、授精可能な時期になると以前に選んでおいた雄と交尾するということらしい。そこまでやりますか。

他にも興味深い発表が多数あり、行動生態学が現在も盛んであることが実感された。また多くの発表で研究目標が明確かつ適切で、実験・調査に必要な人・金・時間・技術が投資され、データの質・量とも優れていた。ここではこれ以上発表内容を紹介できないが、12月1日から私の地元つくば市で開かれる行動学会のラウンドテーブル「鳥類研究者の集い：壊れた(?)一夫一妻の神話」でおもしろい研究を紹介する予定にしている。

成末編集委員の
若手インタビュー(6)
濱尾章二さん

若手研究者インタビューは、皆様のご協力
連載することができ、感謝している。
「若手とは、何歳？」との疑問も多いと思う
が、研究上の暦年令と解釈して頂きたい。研
究をステーキ(?)に例えると、「レア」と
「ミディアム」の状態が若手で、「ウェルダン」
になったら熟年と考えている。若手インタ
ビューをお願いする時に、いつもこの点で失礼
に当たらないか、懸念している。

前置きはこの辺にして、今回ご登場願うの
は、濱尾章二氏で、現在浦和市立南高校のバ
リバリの先生である。今春まで、上越教育大
学大学院・生物学研究室(中村登流先生)に
2年間国内留学され、新潟県妙高高原でウグ
イスの社会構造を研究された。

濱尾氏は、東京農工大学時代に大沢雅彦先
生(現千葉大学)と共に、ササ型林床を有す
る尾瀬の極相林の遷移について、オオシラビ
ソやトウヒの果たす役割を明らかにされた。
尾瀬は日本海側気候で、太平洋側気候におけ
る極相林の遷移とは、異なったパターンを示
すという。詳しくは、濱尾・大沢(1984)「尾
瀬におけるオオシラビソ林の更新」森林立地
XXVI(1)や濱尾(1984)「極相林の維持機構」
(埼玉生物第24号)を参照されたい。



ウグイスに注目したのは、さえずりの期間
が長く、同じなわばりの中で、複数の巣を見
つけたことに端を発し、一夫多妻ではないか
と直観したという。大学院に進学した頃は、
まだカスミ網も張ったことがなかったので、
学生さんの手伝いをしながらその技能を身に
つけたという。現在でも時々秋ヶ瀬(埼玉県)
で内田博氏らから手ほどきを受けているよう
である。中村先生も藪の中でウグイスの巣を
探したり、その行動を見ることは並の決意で
は挫折するのではないかと心配していたよう
だ。しかし、日陰の植物とも言えるオオシラ
ビソに注目したり、日陰にすむウグイスの
実態をつきとめるなど、「真相は藪の中」と諦
めず、日陰の研究対象に光を当てたのである。
一夫多妻の鳥たちはなぜか男心を引き付け
るようであるが、同氏は現在、妻一人と共に
男児二人を育すう中とのことである。

草原の国で出会った鳥と人

藤田 剛

この7月末、モンゴルを訪れた。日本野鳥
の会がすすめているツル類の総合研究*の一
環として、同国でのツルの生息状況を調べる
ためである。モンゴルは、手つかずの自然が
たくさん残った本当に美しい国だった。この
スペースをお借りして、この旅で出会ったモ
ンゴルの研究者と鳥たちについての感想をお
話したい。
鳥について

私たちが調査したのは、モンゴル北東部の

ステップ気候に属する地域だった。この地域
には、乾燥した草原が延々とつづき、その中
には、川や湖、湿原などの湿地が散在してい
た。

もっとも広く存在した環境である草原には、
アネハヅル、ソウゲンワシ、ヒメコウテンシ、
イナバヒタキなどが、たくさん生息していた。
ノガンもわずかだが生息していた。また、湖
などの湿地には、マナヅルをはじめ、オオハ
クチヨウ、サカツラガンなどさまざまな水鳥



写真1 モンゴルでの重要なマナヅルの生息地ウルツ川

がたくさん繁殖していた。

草原も湿地も、平坦で歩きやすく、見通しのきく、鳥の調査をしやすい場所が多かった。また、おもしろそうな種や研究テーマなどもいくつかころがって(?)いそうな感じだった。鳥の研究者について

調査では、Bold Ayurzaryn 博士と Tsevenmyadag Natsagdorjin さんという2人のモンゴル人研究者と一緒にこの2人は、科学アカデミーの鳥部門で仕事をしながら、鳥学会の Directry と Secretary を務めており、モンゴルでの鳥の研究活動の中心的な人たちだった。そこで、かれらにモンゴルの鳥学や彼ら自身のことについて、質問してみた。

まず鳥の研究者の数について。モンゴル国内で、鳥の研究者として博士号をもっているのは、たぶん Bold 氏1人だけ。また、鳥の研究を生業とする人もわずか10人たらず、その中にはもちろん Bold 博士と Tsevenmyadag さんの2人も含まれている。

彼らが興味をもつ研究テーマについて。2人とも「今は、モンゴル各地の鳥のリストづくりで精いっぱい」とのことだった。他の研究者も「主には、各地での標本収集と確認種の記録、個体数を数える作業を行なっている」とのことだった。ただし、まだ30才代後半の Tsevenmyadag さんは、湿原などに生息する水鳥をもっと詳しく調べたい、と熱っぽく語

っていた。

ことばについて。2人ともロシア語は読み書きと会話が普通にできるようだった。また、ドイツ語も、読むことはできるらしい。英語は、簡単なあいさつ程度なら知っていた。

研究活動に対する地元の人々の理解

調査した全域には、ほんのわずかしかが人がいなかった。そのわずかな人々も、遊牧生活を営む人がほとんどである。それら遊牧民の私たちに対する態度は、非常に協力的だった。食料をわけてくれたりするだけでなく、ツルを捕獲するために、彼らの貴重な財産であるウマを貸してくれたりもした。

これは国民性もあるかも知れないが、今までこの地域で調査してきた Bold 博士たちの努力のおかげでもあるだろう。

野外生活

モンゴル人5人、アメリカ人2人、中国人2人、そして日本人1人と総勢10人で行なった3週間のキャンプ生活は、本当に快適だった。

季節は真夏だったが、カヤアブはほとんどいなかった。気温も日中30度近くまであがることもあったが、ほとんどは20度前後ですごしやすかった。食べ物、油分の多いヒツジとヤギの肉になれてしまえば、とてもおいしい料理だった(ただし私は、最後の数日間、ヤギという字をみるのも嫌になるほど、胃が

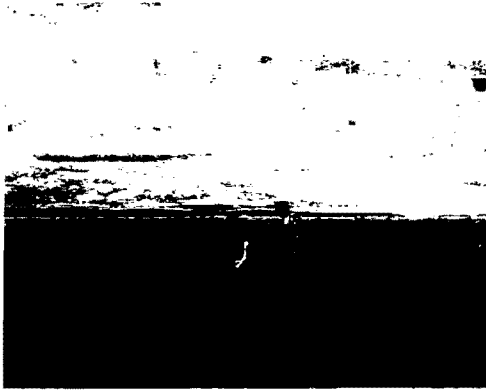


写真2 標識をおこなったマナツルの幼鳥と
モンゴルの研究者

もたれてしまったが、意外なほど水もふんだんにあった。草原の中にある井戸で飲んだ水は、ほんとうにおいしかった。

おわりに

以上、たぶん誤解や偏見も多いと思うが、モンゴルの自然や人々に対する感想を、述べさせていただいた。

ロシアの政治体制が大きく変わり、モンゴルも、やっと私たち日本人にも門をひらいてくれた。アジア大陸を舞台とした研究が、日

本人にも可能になりつつあるのだ。

私は、皆さんにも、モンゴルなど中央アジアの自然に興味をもち、やる気になれば、だれでもモンゴルで調査ができることを知ってもらいたくて、この文章を書いた。

もし、自分の研究テーマなどに深く関係しているのにも係わらず、モンゴルなどの中央アジアに行くことをあきらめていた方が、この文章を読んで、思い直していただければ幸いである。また、これから新しいテーマを探している方は、中央アジアの自然も、自分のフィールドだと思ってテーマを決めてみてはいかがだろう。

さて、肝心の私たちの調査の成果については…？ また別の機会、別の場所で報告するつもりである。

*：正式名称は、

「ツルの生態と渡りに関する総合研究」。

日本野鳥の会が読売新聞社との共同事業、NECの協賛事業、山階鳥類研究所、NTT、東海大学などとの共同研究として実施している。

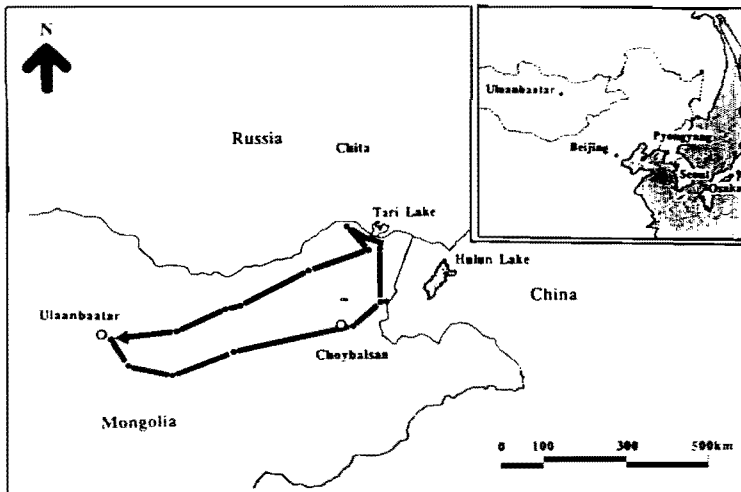


図 調査経路。矢印がおおよその移動経路で、黒丸がキャンプサイト。移動距離はおおよそ 2,400kmで、すべてジープで移動した。

国際モズ類シンポジウム

1993年1月11日～15日に第1回国際モズ類シンポジウムが開かれます。開催場所は、Archibold Biological Station (Lake Placid, Florida, U. S. A.) です。詳細問い合わせは大阪市立大学理学部 山岸哲氏まで。

千葉県立中央博物館自然誌シンポジウム

第4回千葉県立中央博物館自然誌シンポジウムが11月15日(日)に県立中央博物館で開催されます。テーマは「ブナとブナ林の自然誌」です。参加は自由、無料です。また特別展として、「ブナ林の自然誌」が9月26日～11月29日まで開かれています。問い合わせ：〒260 千葉市中央区青葉町955-2 県立中央博物館 (043-265-3921)

日本動物行動学会大会

第11回日本動物行動学会大会が12月1～3日につくばの科学技術庁研究交流センター(つくば市竹園2丁目20-3)で開催されます。参加・発表の申し込み期限(9/15)は過ぎていますが、当日参加も可能です。問い合わせ：〒305 つくば市小野川16-2 国立環境研・野生生物保全研究チーム内 日本動物行動学会第11回大会事務局 (0298-51-6111、内 250)

日本生態学会大会

第40回日本生態学会大会が1993年4月1～4日に島根大学にて開催されます。大会参加費は5,000円(学生4,000円)、懇親会費は5,000円で、申し込み〆切りは12月16日。鳥関係の発表はもちろん、鳥以外の動物・植物の生態に関する発表が多数あり、よい刺激になる学会です。問い合わせ：〒690 松江市西川津町1060 島根大学・理学部・生物学教室内 日本生態学会第40回大会準備委員会 TEL. 0852-32-6436または0852-32-6440(ダイヤルイン) FAX. 0852-32-6449

ガラスにぶつかる鳥の記録を送って下さい!

アメリカのMuhlenberg大学のクレム氏から、世界からガラスにぶつかる鳥のデータを集めているが送って欲しいとの便りが届きました。ガラスにぶつかる鳥のデータをお持ちの方は、下記の住所へ送ってあげて下さい。送り先は：Daniel Klem Jr., Biology, Muhlenberg College 2400 Chew Street, Allentown, PA 18104-5586, U.S.A.

日本鳥学会1992年度大阪大会からのお願い

すでにご案内の通り、11月22～23日に大阪市立大学で本年度大会が開催されます。予定通り9月10日に講演申込は閉め切らせていただきました。しかし、大会への参加はまだ余裕がございますので奮ってこれからもお申込下さい。

また、最近ご入会の方で、大会案内が届いていない方は直接大会事務局までご請求下さい。大会不参加の方々はお忘れなく総会委任状をお送り下さい。

なお、大会参加者及び講演要旨希望者には10月下旬にプログラムと講演要旨を送付いたします。
(大阪大会準備委員長 山岸 哲)

連絡先：〒558 大阪市杉本3-3-138

大阪市立大学理学部生物学教室気付、日本鳥学会大会事務局

TEL. 06-605-2584(直)、FAX. 06-605-2522

◆第2回鳥学会改革委員会開催される

第2回の改革委員会は9月28～29日に国立科学博物館分館会議室で7人の委員の出席で開かれました。会長・評議員などの選出方法や任期などにかかわる会則の整備、学会の方向性や学会の抱えている問題点、事務所の移転などについて、活発な議論が交わされ、答申をまとめました。この答申は11月に大阪市大で開かれる学会大会時に、評議員会にかけられ、総会で会員の皆様のご意見を伺う予定です(尚、委員会の構成は、委員長：中村登流、委員：中村司、森岡弘之、山岸哲、齋藤隆史、福田道雄、上田恵介、藤岡正博の8名です)。

◆日本鳥学会国際シンポジウムの準備状況

来年の秋に予定されている日本鳥学会の国際シンポについては、中村浩志、樋口広芳、上田恵介の3人の委員が中心になって、準備を進めています。当初、予定していたN. B. Davies博士は諸般の事情で来日出来なくなりましたが、Davies博士から推薦のあったスウェーデン・ウプサラ大学のA. P. Møller博士からは快諾を頂いています。

◆「日本鳥学会奨学賞」って、知ってますか？

日本鳥学会奨学賞は、その年の日本鳥学会誌の中でもっとも優れた論文を発表した学生・院生(修士まで)・アマチュアに対して与えられるもので、副賞(5万円)が付きまゝ。今回は第39巻に「ヨシゴイの集団繁殖」を発表された内田博・松田喬氏の受賞が決定しました。

編集後記

- 学会、シンポジウム、ゼミ、集会etc、週末にはいろいろな行事が重なってしまいます。皆さんの活動量が増えているのでしょうか(花)。
- 皆さん、論文を書いていますか？ 秋は論文の季節です(K)。
- 鳥学ニュースへの投稿もお待ちしております(成)。
- 今月も狭山丘陵の不法残土処理問題で役所とやりとり(☺)。

鳥学ニュース No.45

1992年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内 (03-3364-2311)

発行人 森岡弘之

編集(幹事) 上田恵介・中村一恵

印刷所 添田印刷株式会社

(スタッフ) 大塚 聡・花輪伸一・成末雅恵